



# 地域共生 信州

## 令和元年 東日本台風災害 「ONE NAGANO」の取組



### 第3回 地域共生社会推進 長野フォーラムを開催しました

2020年2月6日 松本市浅間温泉文化センターにて230名あまりが参加。



### C O N T E N T S

02 多機関の協働で課題を解決

令和元年東日本台風 災害  
「ONE NAGANO」の取組を振り返って

04 共生の地域づくりのために

05 国の動向  
～重層的支援体制整備事業創設へ～



Vol.02  
2020.Mar

### Special Report

第3回 地域共生社会推進 長野フォーラム  
ONE NAGANO の取組に学ぶ  
多機関協働による地域の課題解決

06 基調講演  
ボランティア精神が拓く地域共生社会  
たすけ上手・たすけられ上手に生きる  
上野谷 加代子 氏 同志社大学大学院 教授

08 シンポジウム 実践報告  
地域共生社会を目指して  
～ ONE NAGANO の実践から～

12 まとめ  
《つなぐ》人材により、共生社会づくりの  
展開へと広がる被災地支援  
石井 布紀子 氏 NPO 法人さくらネット 代表理事

# 多機関の協働で課題を解決

## 令和元年東日本台風災害「ONE NAGANO」の取組を振り返って

地域共生社会の実現に向けて、福祉制度の縦割りを超えて調整する「相談支援包括化推進員」の配置や、福祉や観光、農業、まちづくりなど異分野の協働による、誰もが輝けるまちづくりに向けたコーディネート力が重要です。今回の災害復旧の活動を振り返ると、私たちが目指すコーディネートの力が見えてきました。

1

### 住民のエンパワメント

ニーズの掘り起こしの徹底と積極的なボランティアの募集

高齢化が進む被災地域。多くのボランティアが訪れ、被災者に寄り添うなかで、地元が元気になり、若者たちも立上がる。

2

### 制度・分野の縦割りを超えて

ボランタリー精神とコーディネートの力で克服

官民の支援者がそれぞれの分野・領域を一步ずつ踏み出して、課題解決に取り組むためにコーディネートの力が重要。

3

### まちづくりの視点

「働く」をキーワードに全ての人が活躍する地域に

地場産業の復興なくして被災地の復興なし。「社協、農協、生協、宗教」など、分野を超えた協働が農ボラ、農福連携に発展。

1

### 住民のエンパワメント

～ニーズの掘り起こしの徹底と積極的なボランティアの募集～

- 積極的なボランティア募集。たくさんのボランティアの数の力で変わっていく地域の景色。徹底した寄り添い支援により築いた住民との信頼関係。
- 外部支援者との連携も後押しとなり、持続可能な地域づくりへと立ち上がる住民。

#### 被災地の状況（長野市北部地域）

圧倒的な泥の量、地域を埋め尽くす大量の災害廃棄物  
一方、国道は大渋滞、住宅地はもともと狭い道路  
駐車スペースもなく、なかなか外から支援が入れない  
⇒復旧が進まない  
〈住民の不安、焦り、絶望〉

復旧の課題

#### ＜被災者本位＞

一人ひとりのボランティアの想いを受け止めつつ、活動を通じた住民との対話を促し、徹底した寄り添いの意味を伝え続ける

#### 住民の声

ボランティアのおかげで地区内の景色が一変した。ここに戻れるかもしれないと(被災後)初めて思った。

「住み続けられる地域」「コミュニティの再生」を目標にした「おもてなしセンター」

#### ＜地元主体＞

区の単位でサテライトを設置  
地域の実情に合わせて、さらにエリアを細分して住民とともに運営  
⇒地域からたくさんのニーズが挙がるよう変化

#### ＜協働＞

社協ネットワークの底力（スタッフ派遣3ヶ月で約3,500人）  
多様なNPO・関係団体との連携  
福祉専門職団体とニーズの掘り起こしを徹底

積極的かつ大規模なボランティア募集  
(長野市災害VC 1日最大3,578人)

1日最大22台

大規模な駐車場  
(長野市南部災害VC)の確保

大型バスで長野市北部災害VCに送迎

1日最大20台

小回りの利くマイクロバスに乗り換えて被災エリアのサテライトへ移動



被災した福祉施設にサテライト



地元若手農家が結成「津野復光隊」

## 2

制度・分野の縦割りを超えて ～ボランティア精神とコーディネートで克服～

- 災害廃棄物の搬出が進まず、被災地の復旧が進まない。
- コーディネートの力で、官民の関係機関が一步步踏み出し、協働するプロジェクトで課題を解決。



軽トラボランティアが大活躍

### 被災住民

- ◆ 片付けたごみの置き場がなく、地区内に溜まる。
- ◆ 災害廃棄物の片付けは行政の責任。

### 行政

- ◆ 災害廃棄物の仮置き場の確保が困難
- ◆ 住民が決めた仮置き場の片付けは、市の業務外

復旧の課題

コーディネートのカ

ONE NAGANO Project



災害NGO 結代表 前原 土武さん

住民側、行政側それぞれに対してフォローしつつ、カラフルなカード(つなぎ先)にバツとつないで実行してきました。“半歩飛び出す”“オーバーラップしていく”、みんなでできることを広げていくことが調整役・コーディネーターの役割です。



## 3

まちづくりの視点 ～「働く」をキーワードに、全ての人が活躍する地域に～

- 甚大なる農地被害。行政の災害復旧事業が動き出す前に、被災したりんごの木の根元の廃土を進める必要がある。
- 地元JAを中心に、信州農業再生復興プロジェクト(農ボラ)が立ち上がり、農業ボランティアが活躍。行政の信頼を得て、農福片付けプロジェクト(災害復旧業務における福祉的短期就労)に発展。

<原則> 災害時の農地復旧(激甚災害の場合)  
災害復旧事業(国の補助率95%)にて業者対応が可能

### 行政

- ◆ 業務が集中して、事業開始に時間が必要

### 土木業者

- ◆ 災害漂着物を片付けないと重機が入れない
- ◆ 人手による作業は受託できない

### 農家

- ◆ 果樹の根元の廃土をしないと果樹が死んでしまう。
- ◆ 来年の作付のため、速やかに排土作業の本格化を

- ◆ 農業ボランティアにより、スピーディに災害漂着物の片付けと果樹の根回りの泥出しに着手
- ◆ 農福連携により、障がい者就労支援事業所が行政から災害漂着物の運搬業務を受託
- ◆ 事業所の利用者が被災により休業中の農家とともに作業を実施。「働く」人材として活躍。

農福片付けプロジェクト



- 災害時支援ネットワーク(※1)がサポートしてボランティアセンターを運営
- 災福ネット(※2)による平時からのつながりが生きて、農福片付けプロジェクトにつながる

※1 NPO、社協、生協、連合、JC、シニア、共同基金会等により災害時に円滑な支援ができるよう構成。

※2 長野県災害福祉広域支援ネットワーク協議会 平成31年2月、官民21団体で発足。「長野県ふくしチーム員」を養成し災害時に派遣。

# 共生の地域づくりのために

## 地域社会のいま

- ◆少子高齢化
- ◆人口減少
- ◆家族の単身化
- ◆非正規雇用の増加

### 複合的な課題の深刻化

社会的孤立、ひきこもり、ダブルケア、8050問題など

家庭力や地域力、寛容性の低下

外国人、LGBT、発達障がいなど  
様々な個性を持った住民の包摂の視点

## 「我が事・丸ごと」の地域共生社会へ

地域共生社会は、制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会です。

今後の福祉改革を貫く基本コンセプトです。

## 行政計画

### 長野県地域福祉支援計画 (2019~2022)

基本理念 **ともに生きる ともに創る 地域共生・信州**



#### 「ごちゃまぜ」の社会

地域の中で、誰もが居場所と役割を持ち、その人らしく生きることのできる「ごちゃまぜ」の社会



#### 「新しいお互い様」の社会

「支え手」「受け手」の役割分担を超えて、皆地域づくりの主体として支え合う「新しいお互い様」の社会



#### 包括的に支える社会

住民や団体、法人など多様な担い手が地域福祉に参加し、地域性にあわせて自助、互助、共助、公助が包括的に支える社会

## 民間計画

### 信州ふっころプラン (長野県地域福祉活動計画 2020~2022)

(7月予定)

共通目標 「ともに生きる ともに創る 地域共生・信州」の実現に向け、学びと実践を深化させ、あんしん未来を創造します。

#### 使命

#### 実践目標

### I 「ともに生きる」を発信する

1 「ごちゃまぜ」の力をまちづくりの原動力に

2 福祉・介護の魅力発信とイノベーションの促進

### II 「ともに創る」を実践する

3 地域共生社会の実現を目指した地域福祉の充実

4 断らない相談支援に向けた包括的支援体制づくり

5 ライフステージに沿った総合的な権利擁護体制づくり

6 福祉を支える人を「育てる、支える」仕組みの充実

### III 「あんしん未来」を創造する

7 みんなで取り組む災害に備えたあんしんの仕組みづくり

8 あんしん未来創造センターの設立を目指して

# 国の動向 ～重層的支援体制整備事業の創設へ～

## 地域共生社会の実現

地域に生きる一人ひとりが尊重され、制度の縦割りを超えて多様な経路でつながり・参画できる社会

→ 高齢・障がい・子ども・困窮の各分野の相談を一体的に受け止める相談支援機関の包括化を推進。

しかし

## 理想と現実

### 【事例】

市役所内に全世代対象型の「福祉総合相談課」を開設し、包括職員が高齢者以外の相談も対応開始。

→ 会計検査院から、高齢者支援を対象とした補助金の目的外使用の指摘。

→ 各種相談支援機関の機能を明確に分ける体制に後戻りせざるを得なかった。

そこで

## 〈R3年度〉社会福祉法、介護保険法等改正

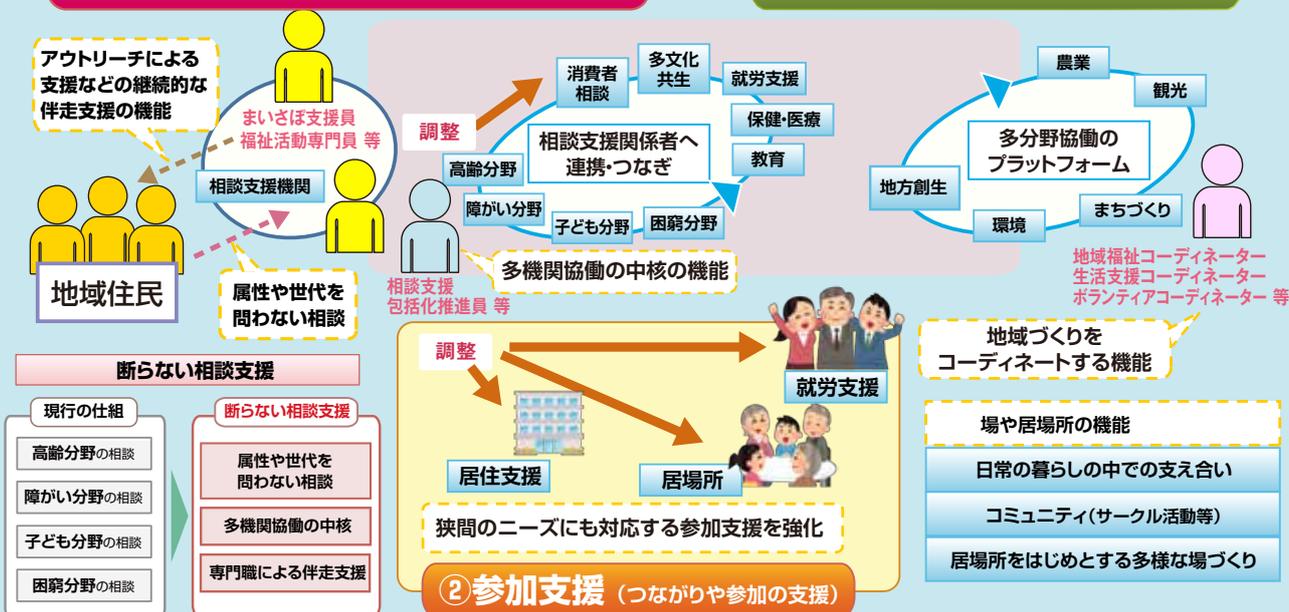
市町村が高齢、障がい、子ども、生活困窮の制度ごとに分かれている相談支援の財政を一帯的に活用できるメニューの創設。

## → 重層的支援体制整備事業

## 重層的支援体制整備事業

### ① 断らない相談支援 (市町村による相談支援体制)

### ③ 地域づくりに向けた支援体制



厚生労働省 地域共生社会推進検討会最終とりまとめ 一部改変

## ① 断らない相談支援

箕輪町社協の西澤地域福祉コーディネーターは、コーディネート業務を「地域で支える」「地域を支える」「地域を支える」の3つの柱で捉え、住民からの相談を生活丸ごと受け止め、地域を巻き込みながら、住まうことを支えたり、居場所や活躍の場を探します。地域との関係がうまくいっていない場合は、本人の気持ちや想いを地域の人に「和文和訳」しながらつなぎなおす伴走支援を行っています。



## ② 参加支援

長野県社会福祉法人経営者協議会が実施する「信州あんしんセーフティネット事業」のプチバイト事業は、様々な地域や分野の事業所が職場体験の受け入れ先となっています。長期離職や引きこもり状態から社会との接点がなくなってしまう方などをまいさば支援員が調整し、本人の主体的なかかわりを促しながら社会とのつながりや就労への意欲喚起を目指しています。



## ③ 地域づくりに向けた支援

宮田村社協では、介護保険の生活支援体制整備事業を活用して地域のお宝探しを継続的に行っています。黒沢地域支え合い推進員は、暮らしの中にある何気ない活動を住民とともに発見し、その活動にある支え合いの意味を伝えていきます。また、こうした活動を評価する手段として、行政との共催による「地域のお宝大発表会」の開催や、「むらのお宝通信みやくみやく」を定期発行して人と人とのつながりの大切さを発信しています。



# 第3回 Special Report 地域共生社会推進 長野フォーラム

ONE NAGANO の取組に学ぶ  
多機関協働による地域の課題解決  
～社協、農協、生協、宗教がつながった！～



長野県社会福祉協議会主催  
2020年2月6日開催  
於 松本市浅間温泉文化センター



## ボランティア精神が拓く 地域共生社会 たすけ上手・たすけられ上手に生きる

基調  
講演

〈講師〉上野谷 加代子 氏

「広がれボランティアの輪」連絡会議会長  
同志社大学大学院 社会学研究科 教授

プロフィール

研究テーマは、地域を基盤としたソーシャルワークの展開方法（論）と教育方法。前日本地域福祉学会会長、前日本福祉教育・ボランティア学習学会会長、ソーシャルワーク教育学校連盟副会長、中央共同募金会理事、大阪市をはじめ全国各地の地域福祉計画策定委員会委員長、等で活躍。著書に「地域福祉の現状と課題」（共著）（放送大学教育振興会 2018）など多数。

### 仲間がいるから、心は折れない

私はたすけられ上手です。それは子育てをしながら働いていた時、地域の商店街の方々にとてもたすけられたという経験からです。皆さんはどんなときにたすけられたか、覚えていますか。

社会福祉実践はときにしんどいものです。それぞれの人が理想や理念、使命感をもって動いていますから、自分の実践の理念と現実とがあまりにも乖離しすぎるとしんどくなってしまいます。一人だけ頑張っても前も後ろも横にも誰かがいなかったら孤独感を感じます。孤立はしていないけれど、つらいものです。災害のときの状況は特にそうです。私は阪神・淡路大震災以降、全国を駆け回りました。災害支援は泣くことのほうが多く、心が折れそうになります。そうなりながらも決して心は折れません。なぜなら、そこにたすけあう仲間がいるからです。

そういう意味で、私たち自身が、どんなときに、どこで、誰に、どのようにたすけられ、その結果、どう感じ、どうなったかということ、社会福祉実践の上で喜怒哀楽の感情を含めてしっかりと自分の体と心に蓄積していくことがとても大事です。それこそが次につながる大きなエネルギーになると私は思っています。

### ボランティアと被災地復興支援活動

日本におけるボランティアは1960年代から様々な民間団体が主導してきた歴史があります。1995年阪神・淡路大震災では初めてボランティアをしたという人が多く、行政の補完をし、重要な役割を担いました。2011年の東日本大震災でも多くの災害ボランティアが活躍しました。災害支援・地域福祉にはボランティアとしての民生委員・児童委員の皆さんの役割も大きいです。

被災地支援では、復興のもつ意味は様々です。以前私は「災害支援ボランティアはコミュニティワークである」と全社協の手引きに書きましたが、関西学院大学の池埜聡先生は「災害によって翻弄された人生の主導権を被災者に再獲得してもらう支援の総体」と定義しました。私はこの定義が大好きです。人生の主導権とは、自己決定権、気づく力、感じる力です。それを再獲得するには、精神的・社会的にも経済復興を含め、一つだけで成り立つものではありません。いろんなことながら翻弄されている被災者にとって主導権はなにか。現在、来年、5年後の主導権はどうなっていくのか。そうした発想が必要です。

甚大な被害をもたらした令和元年東日本台風災害では、「ONE NAGANO」をスローガンに官民の支援者がそれぞれの分野・領域を一步一步踏み出して、被災地の問題解決に取り組む実践が行われました。本フォーラムでは、今回の災害対応を題材に地域共生社会の実現につながる実践を整理し、日頃の相談事業やまちづくりに活かすべき教訓を学びました。

地域福祉視点での災害ソーシャルワークは、被災者に「寄り添う」ことです。伴走型とも言えますが、ここでの伴走とは、介入をしながら関わりから降りないということです。伴走と介入の繰り返しなのです。

### 参加と協働は、越境の練習が必要

地域共生社会に向け、様々な参加（参画）と協働による支え合いづくりが私たちの役割です。参加には、社会、経済、政治の3つの参加があります。社会参加は子ども食堂など、経済参加は共同募金運動など、政治参加は投票や自治組織への参加などです。そして協働にもいろいろあります。私が好きなのは公民協働よりも民民協働です。民間が協働して力を貯めれば公は必ずこちらを向いてくれます。その代わりに民間が分裂していたらだめ。とにかく民民協働をつくっていくことです。今回の長野の災害支援は民民協働の最たるものだと思います。

しかし協働は難しいです。ではどうすればいいか。まずは一人の力では無理ということを実感する。そして連携・協力・協働するための積極的な対話ができるように練習を重ねることで。対話によって徹底的に相手の懐に入り、相手も入ってきて対話をするから共感が生まれ、協働ができるのです。

だから、多機関、多職種連携では、それぞれが歩み寄る必要があります。そして、ここでの連携は機能連携です。ソーシャルワーカー、介護士、ドクターが持っている機能とは何か。保健師にしても地域によって機能は違います。その人が持っている機能を発揮しているかないかです。そうした機能連携は何かという見方ができないと参加の問題は解決できません。今の社会参加のあり方を考えるときに、私たちは参加に導くようなことを考えていかなければいけないと思います。

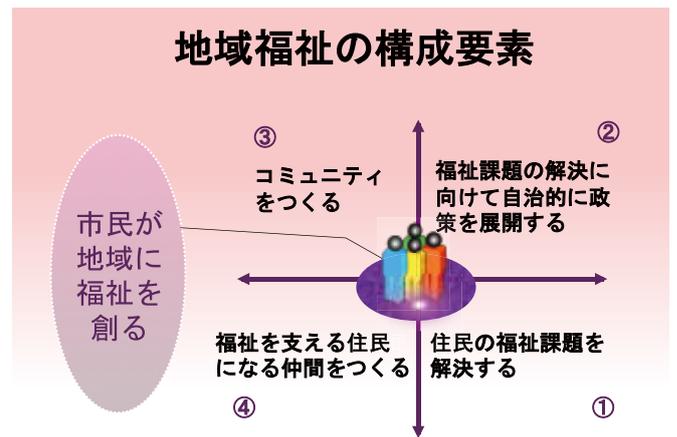
### 日本の社会福祉の動向 地域福祉が主流

今、日本の社会福祉の動向は、地域福祉が主流になっています。地域住民に社会福祉とは何かを説明するときは、「幸せ探しと幸せづくり」と言ってください。憲法 25 条と 13 条。幸せをつくる権利です。

地域福祉は誰がするか。主体は霞ヶ関ではありません。「私」「私たち」がします。だれとするか。あなたと、孫と、隣の人と、行政の職員と一緒にする。だれが、だれと、どこで、どのようにするのかにこだわります。どのようには、「参加と協働」です。そもそも福祉は、古くから民間がやってきたあとから法律がついてきました。

地域福祉は4つの構成要素があります。それは①住民の福祉課題を解決する ②自治的に政策を展開する ③コミュニティをつくる ④福祉を支える住民になる仲間をつくる です。この地域福祉の考え方を入れ込めば、災害時にも適用できます。つまり、①衣食住など被災者の福祉課題を解決する ②ルールを作ったり、自治的に要望をまとめてニーズを把握する ③被災者による助け合い、学び、ボランティア講座をする ④被災者による自主運営組織、見守り隊などとなります。平時の地域福祉が災害時に活かされるということです。

\* 地域共生社会の理念 ○すべての人々が地域、暮らし、生きがいとともに作り高め合う事ができる「地域共生社会」を実現する。○支え手側と受け手側にわかれぬ ○すべての地域住民が役割を持ち支えあう。○自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、福祉などの地域の公的サービスと協働して助け合いながら暮らしを営む権利としての地域共生社会へ、自立と尊厳を尊重する。



### ボランティア精神で ひたすらなるつながりを

社会福祉は、その人の人生に寄り添うことだと思っています。私たちは一人の人を見守り続けることをそれぞれ分担しているだけです。赤ちゃんを、死にゆく人を、たまたま分担している。だから決して「私はなにその専門ですから」とは、おこがましくて言えません。そして地域の人と一緒に連携をする。それには支える基盤がなかったらなかなかできません。長野県の基盤は県社会福祉協議会が中心となってあらゆる団体との連携が始まりました。長野県には人材がいて、可能性がたくさんあります。これは財産です。志と一緒にしながら、ボランティア精神でひたすらつながる。皆さん方には自己変革とともに、「あんな人になりたい」「あの感じでやりたい」というロールモデルをつくりながら、次世代へつなぎ、持続可能な社会づくりをしていただきたいと思います。どうぞ「たすけ上手・たすけられ上手」の学びの人になってください。

**地域共生社会の実現に向けて、新・地域福祉の推進を**  
住みなれた地域社会のなかで、家族、近隣の人びと、知人、友人などの社会関係を保ち、自らの能力を最大限発揮し、誰もが自分らしく、誇りをもって、家族およびまちの一員として、普通の生活(暮らし)を送ることができるような状態を創っていくこと。  
—上野谷加代子—



軽トラボラ（津野地区）。長野市にはのべ6万5000人を超えるボランティアが活動しました

# 長野市社会福祉協議会における 台風第19号災害支援について

長野市社会福祉協議会 生活支援・地域ささえあいセンター  
主任生活支援相談員 小野貴規氏

実践報告

①



小野貴規氏

長野市は被害が各地区に広がっていたので、それぞれの地域に災害ボランティアセンターの支援拠点（サテライト）をつくることから始めました。特に長沼地区はかなり壊滅的な被害。最大で5カ所の拠点をづくりました。最初の課題は、道路事情などによる災害廃棄物の処理でした。

私が最初に関わった松代地区では、区長をはじめ住民力を活かしたサテライト運営を行いました。住民のほとんどが壊滅的な被害を受けた長沼地区津野では外部からのいろいろな支援者が一緒に協働しながら行う形を取りました。

私たち社協では地域に出向き、依頼があったニーズだけでなく、活動している住民の方に積極的に声をかけて「なにかお手伝いしますか」と、すべての家にボランティアさんを入れることを目標に活動しました。大切にしていたのは、住民の皆さんが切実な声、思いを受け止めるということを大事にして、なんとか全戸に入れることを目標にしました。

そのとき大きな助けとなったのが、NPO、プロボノの人たちです。もう一つ大きい動きだったのが、長野大学の学生です。学生は住民の方と同じ目線でフラットにお宅に入っていける。そこでいろいろ気づいたことを伝えてもらい、その中で我々が専門的な視点、別の視点でどうしようかと組み立てができたので、そこでのいろいろな気づきを支援につなげました。学生の力はすばらしいなと思いました。

災害ボランティア支援から見たことは、まず普段の地域力が活かされるということでした。松代、長沼地区とも地域の支え合いができていたので、もともと持っている力を活かしながら支援をしました。アウトリーチで重要な存在だった

のが、地域のコーディネーター役の人たちでした。地域の様々な情報を我々につないでくれました。

普段の「気になる」ことが、顕在化し、深刻な状態になって現れたり、一方でなかなか関わることができず潜在化してしまうことも実態として見えました。

協働を推進するにあたっては、普段のボランティアコーディネーションに加え、幸運だったのは NGO 側にもすばらしいコーディネーターがいて、いろんな支援の経験を聞くことができ、想いを共有し、全面的に信頼しているいろいろお願いすることができました。

単に家の支援だけでなく、その人の生活自体が今後どうなっていくのかを考えながら活動するためには、専門職の支援だけでなく、住民の持つ地域力がすごく大きな働きをすることをあらためて感じました。ボランティアの皆さんの力もすごい。

これまでボランティアセンターでやってきた人づくりとかヒト・コト・モノ、を発見するまちの縁側事業が、まさに災害支援のときの力になったと実感しています。今回の実践を振り返ると、社協の役割、使命はとても大きく、今後地域共生社会につなげていければと思います。

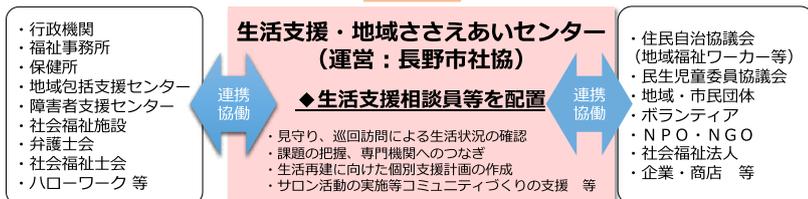
## 長野市生活支援・地域ささえあいセンター

令和元年12月19日に長野市から委託を受け長野市社会福祉協議会内に開設。

高齢者、障がい者、生活困窮者、子育て世帯等

建設型仮設 公営住宅 みなし仮設 在宅生活 等

### 見守り・相談支援 等



避難世帯状況（世帯数）  
令和2年1月10日時点

建設型仮設住宅	県営住宅	市営住宅	みなし仮設住宅
75	56	76	571

長野市住家の被害状況 災害証明書交付件数  
令和2年2月29日時点

全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊
1,034	354	1,305	1,185

## 災害ボランティア支援から見たもの

- **普段の地域力** … 普段の活動が支援力・受援力に違いを生む。
- **アウトリーチ** … 歩き、見て、声をかけて、一つでも取りこぼしをなくす。
- **地域のコーディネーター役** … 地域を知るから様々な地域のヒト・コト・モノにつながる、つなげる。
- **普段の「気になる」が顕在化/潜在化** … 災害ボランティアが「関わり」のきっかけに。
- **受け止める** … まずはニーズを受け止める。「できない」「やっていない」から「できる」を探す。新たなヒト・コト・モノが現れることも。
- **協働を推進するコーディネーター** … 何のため、誰のために協働するのか？ 想いを共有する。
- **地域コミュニティの再興/再考** … 自分たちの地域をどうしたいか、どうしていきたいか？
- **ささえあいセンターへ** … 泥を見ずして人を見る。今後の生活について把握するとともに、健康・福祉的課題等があれば把握し必要に応じて支援機関と共有。



長野市社会福祉協議会では2020年度「相談支援包括化推進員」を配置予定。生活困窮者自立相談支援機関であるまいさば長野市や成年後見支援センター等の権利擁護、ボランティアセンター等を持つ社協ネットワークの強みを生かして、地域住民、事業者、支援機関、専門職等と連携・協働して取り組む。→被災を経験して見えたものを地域共生社会の推進につなげる。





11月14日から31日間で延べ6500人以上が農ボラに参加

# 信州農業再生復興ボランティアプロジェクトの実践を通して

JA ながの ながの農業協同組合  
 営農部 次長 小林芳則 氏

実践報告  
 ③

県内でも有数のリンゴの産地長沼地区は、千曲川の決壊により、広範囲に泥流が流れ込み、出荷間近のリンゴが泥につかりました。JA ながのにおいても共同施設の復旧もままならず、どうしたものかと頭を悩ませていたところ、長野県災害時支援ネットワークから声をかけて頂き、行政をはじめ各関係機関と連携し農協を中心とした農業ボランティアを立ち上げることにになりました。

JAではボランティアを受け入れて活動につなげることは初めてでした。長野県災害時支援ネットワークなど実行委員会の方々の協力で、誰でも活動できる仕組みとわかりやすい流れを考えてくださったおかげで、農地の復興に3年かかるといわれたところ、スピーディーに畑の復興が進みました。農業をやめると言っていた方からも畑がきれいになるにつれ、「もう少しやってみようかな」という声も聞こえ、それはボランティアの皆さんにとってうれしいことでした。気持ちの変化がこうして現れるんだと強く感じました。

農ボラをきっかけに様々なことが動きだし、農福連携も生まれ、12月中旬までの第一期農ボラではのべ6500人以上の参加がありました。

最初のトライアルの翌日は参加者数がわずかでしたが、地元マスコミの報道で一気に人数が増えました。広報の力は大きい。いろんな方々に協力をいただき、このつながり、絆があってなんとかここまでできた感じがします。皆さんのお力添えの中で、農家の本気の気持ち、なんとかしなければというボランティアの想い、各団体のネットワークと協力体制はすごい力を発揮するんだと強く感じました。

農業は地域の産物であり、地域の観光、地域の風景です。これらは地域のものであり、住民の皆さんと一緒に地域産業として農業をしていくことが大切だと私は思います。

復興復旧と農作業は一線をひかなければいけないと考え、農協では農業の求人サイトを立ち上げ、農家の職業紹介事業をやっていく予定です。あわせてボランティアと棲み分けながら、新しい農業の道筋もつくってあげたいと思っています。



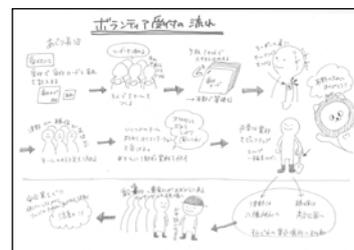
小林芳則 氏

## <信州農業再生復興ボランティアプロジェクト実行委員会>

- 〔共同代表〕 JA ながの代表理事組合長  
 JAグリーン長野代表理事組合長  
 長野県 NPO センター代表理事
- 〔構成団体〕 JA ながの  
 JAグリーン長野  
 長野県災害時支援ネットワーク  
 長野県 NPO センター  
 長野県生活協同組合連合会、長野県長寿社会開発センター  
 日本青年会議所北陸信越地区長野ブロック協議会  
 日本労働組合総連合会長野県連合会、長野県共同募金会  
 長野県社会福祉協議会（まちづくりボランティアセンター）株式会社 長印  
 長沼地区等の地元林檎生産組合（長野市りんごVP）  
 小布施町日本笑顔プロジェクト（小布施町りんごVP）
- 〔協力団体〕 長野県、長野市、長野市社会福祉協議会、ICAN
- 〔事務局〕 長野県災害時支援ネットワーク（県災害対策本部 内）

## ～農ボラ活動までの流れ～

JAがVC機能を行うことは初めて。シンプルで誰でも運営できる機能を目指す。



農ボラの説明はイラストでわかりやすく！



農家さんが迎え、園地へ案内



農ボラをきっかけに動き出した農福連携



行政・建設業者・地元農家が連携した廃土作業に向けた話し合い



# 日本笑顔プロジェクト 台風第19号復興支援大作戦

日本笑顔プロジェクト 代表  
浄光寺 副住職 林 映寿 氏

実践報告

④

日本笑顔プロジェクトは、小布施町を拠点に東日本大震災の復興支援団体として立ち上げました。

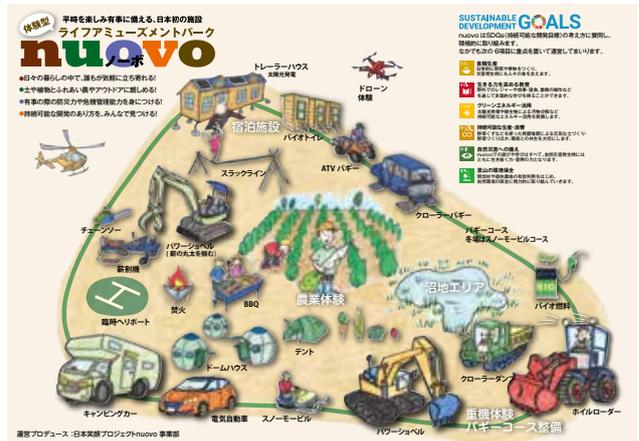
今回の被災地の状況は、炊き出しの支援は数多くあるがトイレの支援がなかったため、仮設トイレを地域に設置する支援を行いました。現地ではトイレの環境が非常に悪く、ボランティア参加を躊躇したという話も聞いています。今後、身体に「入れる」食料や水などの支援はもちろん、トイレなどの「出す」ための支援を考える必要があります。そうした活動の中で、においがなく清潔で明るいバイオトイレとも出会いました。普及率が低いので割高ですが、レンタル会社のご厚意で提供いただき、運搬費だけを負担して穂保地区に設置しました。

災害現場のボランティアでかっこいいと思ったのは重機を操る人たちです。重機を扱えたらかっこいい。そこで重機のアオペレータを100人育てようというプロジェクトを12月から開始しました。県内外問わず災害ボランティアで現地に入っている方、被災を受けた農家の方が受講しています。また、重機は特に力の弱い方が使うべきだと思います。人力での泥かきは大変な作業。小布施町も70ヘクタール、東京ドーム15個分の農園が泥につかりましたが、泥かきは重機でなければできない作業です。りんごや栗の木の根元には女性の繊細さが必要です。重機女子チームを作りたいと女性も対象にして参加いただいています。そして重機やバギーなど被災地で本当に役立つものを集め、その操作方法や防災技術を習う研修施設「アミューズメントパーク・ノーボ」構想を進めています。

今の技術では堤防の決壊を防ぐことはできない。自然災害に対して人間は無力です。減災しかできない。災害が起きてしまったあとにどう行動するかです。活動を継続するためには楽しく、かっこよく、遊びの延長で防災力を考えることが大事です。被災地である私たちの土地が継続可能な形になるよう、生き抜く力を子どもたちにも伝えていくメッセージになればと思っています。



林 映寿 氏



体験型ライフアミューズメントパーク「nuovo (ノーボ) 設立構想  
「nuovo (ノーボ) とは「農業」+「防災」=「農防」



仮設トイレ改善大作戦  
バイオトイレ設置



農地復旧プロジェクト



笑顔のシェアカー



復活農園大作戦「笑顔のほっとステーション」炊き出し活動



灯油ストーブ寄付・灯油提供



重機免許取得講習 オペレータ100人育成



ボランティアのためのボランティア

# 《つなぐ》人材により、 共生社会づくりの展開へと広がる被災地支援



NPO 法人さくらネット  
代表理事 石井布紀子氏



第3回地域共生社会推進フォーラム（以下、「推進フォーラム」）は、ONE NAGANO の取り組みを共生社会づくりの視点から検証する場となりました。シンポジウムの進行役であった私は、会場の様子から、「被災地支援活動は、《つなぐ》人材により、共生社会づくりの展開へと広がりはじめた」という確信を得ることができました。

被災地支援活動を振り返ると、阪神・淡路大震災が発生した1995年は「ボランティア元年」と言われています。そして、2004年に発生した中越地震以降、社会福祉協議会が災害ボランティアセンター（以下、「災害VC」）を担うようになり、東日本大震災を経て、災害VCは一般化しました。

また、地震や津波だけでなく、台風・豪雨等による被害発生時にも、多くのボランティアが被災地に集うようになり、令和元年東日本台風による被害が発生した長野県においては、県内外から多数の県民・市民・地域団体・関係機関等が参加し、多様な活動が生まれました。

推進フォーラムは、上野谷加代子先生の基調講演からはじまりました。被災地における支援活動・ボランティア活動・地域福祉活動の意味、協働・参加の促し方、共生社会づくりにむけて「たすけ上手・たすけられ上手な学びの人」が必要なことなどのお話があり、参加者が自分ごととして受け止めやすい内容だと感じました。

その後、ONE NAGANO の4つの活動報告が行われました。ONE NAGANO とは、令和元年東日本台風により甚大な被害が発生した長野県内における「みんなで復興に取り組む」取り組みです。「被災者、被災地、長野県、

応援していただく方を含めたみんなが元気になること。そして、その先の未来を元気にしていくこと」を目的としています。

4名の報告者は、長野市内の異なる現場において、県内外のボランティア・福祉・企業・農業・宗教関係者など多様な人々が関わる活動現場、運営の仕組みを生み出しました。災害VCの機能だけでは被災地の課題が解決できない状況がありましたが、4名の報告は災害VCと連携した新たな取り組みの実践でした。



4名は、被災した人びとや被災地域の主体的な復旧・復興に「寄り添う」という想いが共通しており、それゆえに、（上野谷先生の基調講演にある）「越境の練習」に踏み込んでいったのだと考えられます。

そして、報告の中では、「つながり」（「つながる」「つなぐ」という言葉が何度も繰り返されました。報告者は積極的に「つなぐ」役割を担い、「つなぐ」役割を担う人と「つながり」を持ち、閉塞感を超える前進のきっかけ、協働による成果を創り出しました。

今後、「主体的な参加」「つなぐ人材」に着目し、復興・防災活動を共生社会づくりと一体的に進めることが望ましいと感じます。また、この日の推進フォーラムは、専門性を意識しながらコーディネートを担う人材の交流の機会でもあり、これらの「つなぐ人材」による地域福祉の実践検証にこそ、未来の可能性があると確信しました。



発災後、サテライト立上げを地元、NPO、社協で協議



地元農家、行政、支援者で復旧作業のミーティング



災害VCを基盤におく地域共生社会づくりへの試み